変わった転生者、なんかな？

金髪の雑魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変わった転生者、なんかな？

【Ｎコード】
Ｎ３７４７Ｚ

【作者名】
金髪の雑魚

【あらすじ】
なんか転生できるっぽいから、便利そうな能力の『才能』を貰ってのんびりと生きていこうか？※感想を書かれる際、返信されないことを前提で書かれてください。また、作者はこれが処女作なのでいろいろおかしい所も出てくるかもしれませんがご容赦ください。
１２／１７の活動報告に感想についての文章を載せました。

その1（前書き）

なるべくテンプレ化しないように書くのが目標。

その1

……目が覚めたら、真っ白な空間に居た。

「これはお約束のテンプレかな？あまり期待はしないけど」

だってテンプレ過ぎてマンネリ化してるからね、こういう展開。どうせこの後神様的なキャラが出てきてちょろっと会話して適当に転生って流れでしょ？はいはい即戻るボタン押しましょうねー。

「そぉ？ならテンプレいらない？」

「いや、欲しい」

うん、貰えるもんは貰っとかないともったいないし。

「んで、見た目がフツーで地味で個性の欠片も無さげな君は、どんな事を神様にお願いするのかい？もちろんテンプレ的な選択も良し、奇をてらっても良し、さぁ、どうする？」

何だ最初の余計すぎてお決まりの台詞みたくなってる一言は……そんなに容姿の変更を強いられても困るし、第一容姿はこの地味なのが気に入ってるんだ、あんまし注目されたりしないし。

「限度ってあるの？中二病全開の二次創作のテンプレだと、これでもかってばかりにチートを要求する描写あるじゃん？」

「流石にチートは人生イージーモードでつまらないと思うよ？いやホント。実際自分がそうだからさ、ほんっと、マジで、真剣に」

だろうなー、チートは妄想に留めておかないと絶対つまらんし、なによりチートって単語が好かん。万能すぎるのはつまらん。ちょっとくらい便利なのが一番面白そうで実用的でしょ？例えばーーー

「『他人を幸運にする程度の能力』の『才能』とかどうよ？」

取り敢えずは某シューティングゲームの妖怪兎の能力を言ってみる。このゲームな理由は単純に分かりやすくて一番覚えてるってだけだけど。それに自分の為の能力じゃなくて、他人の為の能力ってのがミソだよね、こーゆーの。後すぐ使える訳じゃなくて、ある程度努力（苦労）しないといけないように『才能』にしたの。

「おぉ、いいチョイスじゃん？この調子で後2個どうよ？」

「なら……『千里先まで見通す程度の能力』と『探し物を探し当てる程度の能力』の『才能』でどう？」

ぶっちゃけ最新作は覚えてないし、キャラが結構好きだったから確実に覚えてるこれがいい。小学校時代のあだ名がメガネだったのと、高校時代お年玉の入った財布を落としたのを忘れないためにも。

「いいねいいね、そのテンプレやチートの否定。攻撃系統じゃないのと『才能』なのがポイントだよねー。んじゃま、そろそろどっかの世界に行ってみよー」

「あれ、どんな世界かは教えてくれない感じ？どうでもいいけど」

「そーゆーと思ってたし、程よくノーマルモードぐらいで行こう。取り敢えず戦闘はあるかもしれないね」

「それだけ判れば十分、んじゃよろしくー」

「軽いねー、いってらー」

そして急に意識が遠のいていった。

「おまけで黒歴史はカットしたげるからー」

さんくす、と心の中で言っておいた。

その２（前書き）

短いのは仕方ない。

その2

自分が転生したことにはっきりと自覚を持ったのは、たしか幼稚園の年長になったぐらいだったっけ？ゆっくりと前世（笑）の記憶と、神様的なキャラとの会話を思い出してった。そしたらまぁ、使ってみたくなるわけだ、能力を。結果としては

『幸運にしたいと思った子が、じゃんけんに勝って劇の主役になれた』

『意識したら、ちょっとだけ遠くが見えた』

『園内に隠してもらったおもちゃの、隠してある部屋が分かった』

となった。初めて行使した割には結構な手応えやった、意外やな。もうちょい難易度高いかと思ったけど……あぁ、成長のスピードとか習得率的なヤツがノーマルモードとかか。それならいいんやけど……こんなちっさい頃からあんま目立ちたくもないし、小3くらいからでいい。

それと、どんな世界に転生したかが分かった。住んでる街の名前が『海鳴市』やった。アレよアレ、リリなの、白い悪魔とかが有名な。

「やからか」

この幼稚園に妙に容姿が整ってたり、歳の割りに妙に大人びてたり、特徴的なアクセサリーしてたりするのがちらほらいるのは。めんどくさいったらありゃしない、いやホント。

「ねえねえ、いっしょにあそぼー」

「ん？いーよー」

でも取り敢えず今はおともだちと一緒に遊ぶことにしよう、余計なこと考えんで済むし。よーし、頑張ってトンネル掘るぞー。

その３（前書き）

口調が安定しないのはわざと。

その3

人生二度目……でいいのか分からんけど、小学校に入学した。私立聖祥大附属小学校って言うんやけど、ここってアレだよね？主人公とかその他キャラが通ってる小学校。めんどくさー……フツーの公立とかの方がお金的にもいいと思ったんやけど、親がここの卒業生らしい。なら仕方ないわなー。

「ーーーそれじゃあ、自己紹介をしてもらいます」

ぼーっとしとったら、いつの間にか自己紹介の時間になったっぽい。自分の前のヤツらが小学生らしい自己紹介をしていく中、見た目が転生者なのが確定的に明らかな男子生徒の番になった。何でかって？そりゃ銀髪に金と紅のオッドアイだよ？中二病に間違いないって。

「俺の名前は神威クリス！好きなことはスポーツだ、よろしく！！」

よく通る声で教室を見渡しながらそう言った。名前でさらに確信した、絶ッッ対に中二病末期の転生者やん。しかも座る直前に見覚えのある女子生徒に笑顔で熱のこもった視線を送っとった。案の定主人公とツンデレとおっとりやった。関わり合いになりたくねー。

「……稲葉くーん、君の番だよー？」

「あ、はーい！」

あれ、もう俺の番か。考え込む癖直さんといかんな……

「さとーいなばです！すきなことはたからさがしです！よろしくお

ねがいします！」

精神面でまだ子供な部分を全開にして自己紹介。てかアレやね、無駄に精神年齢高いから恥ずかしい。勢いだけで乗り越えたって感じやったし。……そうそう、俺の今の名前は佐藤稲葉。稲葉とか絶対能力つながりだろ、慣れるまで地味に恥ずかしかったんやけど。でも流石に太郎とか一郎は目立つよね、普通的な意味で。やから普通の苗字に少しだけ特徴のある名前の、ある意味一番無難な名前でよかった、いやホント。

「高町なのはです！好きなことは友達とお話しすることです！よろしくお願いします！！」

俺の隣の席やけど、主人公元気やなー。てかやっぱ何か雰囲気が違うわ、他の女子生徒と比べて。ツンデレとおっとりも雰囲気違うけど。それと俺以外の転生者も別の意味で。

「平穏に過ごしたいんやけんど……」

地の口調でぼやいて、帰りの号令までずーっとぼーっとしてた。まぁなんとかなる、とか思ってたら絶対なんかあるんやろーけど。

その４（前書き）

一部ｗｉｋｉを参考にさせていただきました。

その4

さて、小学校生活にも慣れてきたころ。学校の近所にある本屋で運命的とも言える出会いをした。

「『ダウジングの全て』……どんな本やろか？」

元々『探し物を探し当てる程度の能力』の『才能』を持ってる訳やし、読んで損は無いやろうとばかりに立ち読みを始めたんやけど――

「……これは買いやわ」

なけなしの小遣いをはたいて、包んでもらった分厚いそれを抱きかかえて家に帰り、早速ゆっくりと読み始める。

『ダウジングは、神の意思、未来、罪の審判などを占う目的で利用したのが原型であると考えられている。』

『中世にはダウジングは悪魔と結び付けられ、異端審問でダウジングを用いることをやめた。』

『今日のように用いられるようになったのは、15世紀のドイツにおいて、金属を探索するのに用いたのが始まりと考えられる。』

『ベトナム戦争で地雷の探知に使われ、地雷による犠牲者が飛躍的に減少したというニュースを契機にダウジングが広く世界中に知れ渡るようになった。』

出だしの一部分を抜き出してみたけど、この時点でいろいろと考察できる。先ず、ダウジングはおそらく誰にでも可能やという事。ダウジングに使ったロッドやペンデュラム（振り子）の反応に気付け

んかっただけで、実は成功してたってのがホントのところやと思う。次に、悪魔と結び付けられるようになったんはマナとオドが関わってくるんじゃないかと言うこと。マナは自然に存在する魔力で、オドは自身に存在する魔力なんやけど、ダウジングはマナの種類や濃度といった『その場所とは異なった部分や異物』をロッドやペンデュラムに通したオドで感知してたんやと思う。ちなみに魔力は霊力や氣、妖力とかに置き換えてもいい筈。最後に、ダウジングは練習した分だけ上達するのは確実って事。さっき言った事を纏めれば子供でも分かる結論やけどねー。

「先ずはロッドとペンデュラムの調達やなー」

「稲葉ー、ご飯よー！」

「はーい！」

取り敢えず晩飯やな。

その５（前書き）

実はＤ〇Ｎネームを考えるのは難しい。

その5

んで、小学2年生になった訳なんやけど、早速事件が起きた。

「私のマフラーが無くなってるの！？」

1時間目の国語の授業が始まる直前、俺の斜め前の席の主人公が悲鳴を上げた。どーやら全校朝礼で教室が誰も居ない間に盗まれたっぽい。大体犯人の想像はつくが……やるんやったらフェイクを残しとけと言いたいもんやわ。

「誰だろう……」

「ひどい……」

目茶苦茶ざわついてっけど、教室から出たヤツは誰も居ない、かつ席にはついとらんがクラスメイト全員が居る。やったらいけるか？

「……やってみっかなー」

呟いて、以前公園で拾って、いろいろ加工して愛用しとる、おそらく石英であろう石のペンデュラムを取り出す。んでもって、右手のそれを順番にクラスメイトの机にかざしていく。イメージは『マフラーに残っとった主人公の魔力残滓』で。

「佐藤君、何やってるの？」

「宝探し」

一言だけ応えてダウジングに戻ったら、なんか皆に注目されてた。見られてる中続けるのは中々苦労したけど、ついに引っかかるヤツがおった。

「何だよ、何かあんのか？」

容疑者は朱色の髪で蒼い眼をしたイケメン、俗に言う転生者やね。ちなみに名前はクラウド・アブソリュート、流石の厨二やな。

「……別に、何でもない」

「言いたい事あるならはっきり言えよ！ぶっとばすぞ！？」

うわ、D○N属性まであんのかよ……ダウジングせんけりゃよかった……

「何でもないって言ってるじゃん、後暴力反対」

と言いつつも、どうせやったら最後までやろうと思った訳で。

「ふざけんなよこのクズやろー！！」

殴り掛かって来るのが見えてたけど、ダウジングの方に専念する。そして殴られる。いてぇ。

「クラウド君落ち着いて！」

「止めなよ！」

ギャラリーが止めてくれたお陰で、D○Nは息を荒くしながら羽交

い絞めにされた。絶好のチャンスやな。

「悪いな」

一言言って、D○Nのズボンを一気に下ろす。そこには予想通りと言っていいのか分からんけど、下半身に主人公のマフラーを巻いた事実が偽ることなくあった。

「キャーーー！！」

「取り押さえろ！！」

前者は全女子、後者は全男子の叫びやった。固まっとったD○Nは一瞬で取り押さえられて、フルボッコにされとった。ざまぁ。

「あ……佐藤君！」

「ん？」

振り返ると主人公がおった。両隣にいたツンデレとおっとりの様子から、お礼言いに来たっぽい。

「ありがとうなの！」

「別にいいよ、これで将来の目標も決まったし」

「将来の目標？」

ツンデレが尋ねてきたから、宣言の意味も含めて言っとくか。

「俺はダウジングで探偵を目指す」

余談やけど、D〇Nは退学になって引っ越したことになっとる。近い未来で、他の転生者の連中に殺されたって知ることになるんやけど。

その６（前書き）

短く簡潔にしていく。

その6

はてさて、よーやく3年生になった。周りのヤツらも段々とそわそわし始めてる。

「やっとかー……」

魔法少女リリカルなのはが、本格的に始まる。

あのマフラー盗難事件で大々的に宣言をしたお陰で、俺はダウザー探偵として皆に認識されとる。しかも主人公を助けたってのと野郎の敵を見つけ出したってので、めっちゃ信頼アンド信用されとる。そして応援もされてる。んで、何で他の転生者に目ぇつけられんかというと、俺の魔力や氣といったもんが一般人よりちょいとあるくらいやからってのがある。後デバイスを持っとらんかったり、主人公達に殆ど関わっとらんかったのもある。でも一番の理由は、あの時のダウジングが俺の素の実力やったからってのがある。『能力』の『才能』に頼らずにどこまでやれるか試したかったんがあの時の考えやったけど、結果的に転生者の目を誤魔化せたっぽい。神様サンクス。

「おはよう」

「ん、おはよー」

今挨拶してきたのも転生者（雰囲気で分かった）なんやけど、フツーにクラスメイトしてる。俺は別に転生者を全員邪険にしてる訳で

もないし、たまたま転生したってだけの連中なんやから、フツーに接してれば相手もフツーに接してくれる。中には過激な連中もいるけんど、そもそもその辺は主人公達にゾッコンやから先ず関わらん。結局何が言いたいかってゆーと、俺の日常は平和ってことやね。

「おはようなの！」

「おはよ」

「おはよう」

誰かが挨拶してきた。振り返って挨拶を返す。

「ん？あぁ、おはよー」

噂をすれば主人公達、近くにはテンプレ転生者の神威クリス。俺の知る限り、主人公組みに一番近しいのはこのテンプレやね。３人の前では比較的雰囲気が大人しいけど、３人が見てないとこやと空気が悪いっちゅーか、３人以外をあんまし気にしとらん。ゾッコンですか分かりたくもありません。

「はーいみんなー！ＨＲ始めるわよー！」

担任が教室に来て朝のＨＲが始まる。始まるといえば原作やけど……そーいやいつからやったっけ？まぁあんま気にせんでいーやろ。

その7（前書き）

つなぎだから短いのは当たり前。

その7

結論だけ言うと、すぐ原作は始まった。何でかって？家から見てたし、音がすごかったし。ちなみに現場（動物病院だっけ？）からは１キロ以上あるけど、『千里先まで見通す程度の能力』の『才能』を鍛えてたお陰で全く問題なかった。そーいえばこの前千里をキロメートル換算してみたら約３９２７キロメートル、つまり才能をものにできれば殆ど見えないものは無いってことになる。これすげぇわ、原作で『見張りに適しているから哨戒を押し付けられた』みたいな描写やったけど、こんだけ遠くのものを見れるんやったらそりゃ安心して見張りを任せれる。

「始まったかー……」

いや、別に始まってほしくなかった訳じゃなくて。普段ダウジングをやってる身としては、ジュエルシードが引っかからないかどうかが心配やとよねー。引っかかったら警察に持ってって、引っかからなきゃそれはそれでありがたい。ジュエルシードでペンデュラムを作ってみたかったけんど、内包しとる魔力がでか過ぎて相性悪いやろうから諦めた。魔力無けりゃ欲しかったんやけどなー……まーいーか、あんま気にしてもゲットできる訳でもないし。

「明日警察署行ってみよーかな？」

ダウザー探偵を目指し始めて、日頃からダウジングをやってるといろいろなものを見つける。んで拾ったそれを警察署に毎回届けてると、結構注目されて覚えられる訳よ。そんでいろんな警察関係者に宣伝、ついでに協力（才能のレベリングしか頭に無かったから打算は無かった）したりして、結果的に信頼をゲットできた。たまに協

力してほしいとかの電話がかかってくるくらい。

「じっちゃんにも顔見せに行くかー」

俺を孫みたいに甘やかす、現役バリバリの切れ者老紳士副署長に久しぶりに会いに行くついでに、警察じゃアレにどんな判断をしたのかを聞いてみよっと。原作じゃ見れんかった部分やから楽しみやわー。

その８（前書き）

元々２つに分けてたのを１つに。大体は辻褄が合うような想像で書かれてます。

その8

原作スタートの翌日、学校に着くと転生者の連中が妙に興奮した様子で『昨日のテレビについて』会話してた。多分マルチタスクで念話でもしてるんやろうね。

「全く、何がしたいんだろーねー？」

地道にこっそりバレないように情報収集して分かったことやけど、転生者連中は数種類に分かれてる。

1・原作に関わり、かつ登場人物と恋仲になりたい。
2・原作に関わり、登場人物とは友達でいたい。
3・原作には関わらず、登場人物と恋仲になりたい。
4・原作には関わらず、登場人物とは友達でいたい。
5・原作も登場人物もどうでもいい。
6・原作を生で体感・傍観したい。

だいたいこの6つやね、俺は言わずもがな5番やけど。こん中で過激なのが1番、比較的マトモなのは2から4番、フツーなのは5番、読めんのが6番ってとこやね。人数的には1番から10：6：1：1：限りなく0：2の割り合い。中でも1番と2番の争いがヤバイ。たまたま結界張らずにドンパチやってたのを見とったんやけど、チート級の能力全開ですさまじかった。負けた方は殺されとったし、絶対に関わり合いたくない。いやホント。

「おはよう！」

お、渦中の主人公が来たか。いつもより興奮気味でそわそわしとる

なー、あとちょっとだけ不安げかな？……探偵たる者、観察眼は常に磨くべし、やからねー。はてさて、何事も無く学校終わるといいんやけど……

「ふぅ……」

今は放課後、ダウジングしながら警察署に向かってる途中。予想に反して学校じゃ何も起こらんかった、ただし放課後は分からんけど。

「……ん？何かある？」

通り抜けようとした細い路地に不法投棄されてたらしいテレビに何故か反応する鉄製のL字ロッド。まさかなー、とか思いつつテレビと壁の隙間を覗くと案の定あった。

「これがジュエルシードかー……」

願わんかったら発動せんらしいし、ポケットに入れてさっさと路地を抜けた。予定通りじっちゃん辺りに渡すか。

「こんにちわー」

「あら、稲葉君こんにちは。副署長に会いに来たの？」

受付のお姉さんが俺に気付いて尋ねてきてくれる。これだけで俺が

どれだけ有名かは分かってもらえると思う。

「うん、副署長室にいる、じゃなかった、いますか？」

「もう、敬語じゃなくてもいいのに。多分いるわよ」

子供やからいいけど、将来探偵として来た時にタメはいかんやろうし、今のうちに練習って感じでやってたけど、やっぱ諦めた。少しずつ慣れればいいやろ。

「ありがとうございました、お仕事頑張ってー」

「どういたしまして」

あんな美人でいい人やのに、何で結婚しとらんのやろ？まー俺が気にすることでもないんやけどね。

「じっちゃん、入っていい？」

「おぉ、稲葉か、いいぞ」

ノックして尋ねると、嬉しそうな声でじっちゃんが迎えてくれた。書類読んでたっぽいけど、仕事中断させちゃったか？

「気にするな、昨日のアレの報告書だよ。読んでみるか」

「あの爆発の？」

捜査報告書を一般人の子供に見せていいのかなーとか考えてたけど、好奇心の方が圧勝した。むしろラッキーって思った。

「……ガス爆発？」

読み進めると、アレは『ガス管の劣化による爆発事故』って書かれてた。まーその辺りが妥当っちゃー妥当だよなー。

「稲葉はどう思った？どうせ現場を覗かせてもらったんだろう？」

「加賀刑事まで駆り出されてたのは意外だったけどね」

加賀刑事――本名加賀圭一さんは柔道と剣道の達人で、おそらく警視庁でも活躍できるくらいのエース。普段は新米警察官や後輩のフォローや柔道と剣道の指導をして、余程のことでもない限り現場は信頼できる部下に任せてる。つまり今回のアレはよっぽどやったってことやね。当たり前か、知らん人から見れば原因不明の爆発やし。

「どう見てもガス爆発じゃないよね、地図も見せてもらったしダウジングもしたから分かるけど、あの辺に劣化したガス管はなかったよ。大体あの辺って結構最近建物が増えたところだし」

「そういうことだ。爆発物の痕跡も無い、爆発を起因させるようなものも無い、そもそも爆発かどうかも不明、でも納得できる形で市民に詳細を伝えなきゃならない。それで結局ガス爆発に収まった。新聞社やテレビ関係、ガス会社、他の関係者には詳細を伝えてあるし、緘口令も敷いた。専門家が調べて詳しく説明したお陰で、諦めの悪かった一部のジャーナリスト達も諦めたぐらいだよ。それだけこの事件……事故か？こいつは厄介で面倒でどうしようもないって

ことだ。まぁ唯一の救いは死傷者がゼロだったってことぐらいか」

「大変だったんだね」

心の底からそう思う。一般人に被害が出らんかったから良かったけど、これで一人でも死傷者が出てたら、また違った物語になったんやないかと思った。

「愚痴になったな、つまらんかっただろ？」

「いいよ、じっちゃんの気が晴れたなら。それに詳しく知りたかったからお礼を言いたいくらいだよ」

「そう言ってくれるとありがたい」

にこにこしながらじっちゃんが言ってきた。じっちゃんの笑顔は穏やかでいい。本当の祖父がもう亡くなってるから、じっちゃんが本当のおじいちゃんみたいでなんかくすぐったい。親以外で一番心を許せる人やろうなぁ……そん次は加賀刑事かなー？

「ん、そろそろ暗くなるな、早めに帰った方がいいぞ？」

「分かった……あ、そういえば」

あぶねー、ジュエルシード渡すの忘れかけとったし。

「これ、ここに来る前に見つけたんだけど、届出出てる？」

「綺麗な宝石だな……届出は出てないが、落とし主が気付けば今日明日辺りに来るだろう。盗品なら被害届に書かれてるだろうから、

後で担当に持って行っとくよ。ありがとうな、届けてくれて」

「ダウザー探偵として当然のことをしたまでだよ。それじゃ、そろそろ帰るよ。仕事頑張ってね、じっちゃん」

「任せておけ、稲葉も気をつけて帰るんだぞ」

「はーい」

副署長室を出て、受付のお姉さんにも挨拶をして家に帰る。そーいや記憶が間違っとらんかったら、明日は神社での戦闘やったっけ？二次創作やとこの辺でトラはの久遠と絡ませるのがあったけど、この世界やとどーなるんやろか？まー俺にはどーでもいーことやけど。

その８（後書き）

※今回見つけたジュエルシードは、本来ＳＳ０１で封印されるものという位置づけです。よってアニメ第３話終了時でなのはが所持しているジュエルシードの総数は本来の６個ではなく５個になります。

その９（前書き）

中途半端な長さだと切るのに苦労する。

その9

今日は原作通りやったら、主人公が神社で3つ目のジュエルシードを封印する。

「関わるつもりないけど……暇やなー」

昨日は用事あったからよかったけど、今日は暇やぞ……家にある勉強用の本も読み終わってるし、宿題は学校で済ませた。

「そうやなー、お金もあるし、翠屋行ってみるかなー」

主人公の実家やし転生者に目ぇ付けられたくないから近寄らんかったけど、一度でいいから行ってみたかったんよねー。ケーキとかシュークリームとかコーヒーがめっちゃ美味しいらしいし。晩飯が食える程度に食べてこよう。

しばらく歩いて翠屋に到着した。実は場所が分からなくてダウジングで探したのは秘密。

「いらっしゃいませ、お一人様ですか？」

「はい、カウンター席でお願いします」

おそらく主人公の父親であるだろう男性が迎えてくれた。本当に3人の子供の父親か？ってくらいに若い。多分少なく見積もっても40近い筈なんやけどなぁ……

「ご注文は何にしますか？」
「コーヒーとショートケーキを」
オーダーを厨房へ渡し、男性が俺に話しかけてきた。
「はじめまして、佐藤稲葉君で合ってたかい？」
「どうして俺を？」
主人公が報告したんかな？これが転生者連中の感に障らなきゃいーけど。
「娘の恩人だからね、本当は君の家に伺ってお礼を言いたかったんだけど」
「いえ、そこまでされなくても大丈夫です。実際、自分のダウザーとしての実力を測るためだけでしたし」
ぶっちゃけ助けるためとか一切考えてなかったし。完全に自分本位だったし。
「それでも、娘を助けてもらったことには違いないよ。ありがとう」
「……どういたしまして」
ちょっとだけ恥ずかしくなってきた。いかんなー、感情が顔に出やすいのは。

「さて、お待ちどうさまです、コーヒーとショートケーキになります」

来た来た。うおー、コーヒーめっちゃいー匂いする。んじゃ一口……

「……ほぅ……美味しいです……」

思わず溜息が出た。たった一口で、すっきりとした苦味が心地よく口の中に広がっていく。

「ケーキも食べてごらん？」

勧められて一口、今度はふんわりとした甘みが口一杯に広がっていった。やべぇ、とにかくやべぇ。てかやべぇしか出てこん。語彙力の足りなさが悲しいレベルやわ。

「ふぅ……ご馳走様でした、とても美味しかったです」

「喜んでもらえて何よりだ」

笑顔で主人公の父親が応える。ホントに美味かった、ハマりそうで怖い。

「えっと、幾らになりますか？」

「あぁ、今日のケーキとコーヒーはお礼の意味も兼ねてサービスだよ」

「いや……いえ、ありがとうございます」

こーゆー時は素直に好意を受け取って、相手の好意を無為にしないこと。これ鉄則やぞ？

「今度は家族で来ますね、後知り合いにも宣伝しておきます」

「それはありがたいね」

じっちゃんや加賀刑事はコーヒー好きだし、絶対気に入るやろうなー。俺がコーヒー好きになったのも2人の影響やし。

「それじゃあ、ご馳走様でした、高町さんのお父さん」

「それだと長いだろう？士郎さん、で構わないよ」

「なら……士郎さん、ご馳走様でした」

「うん、またのお越しを」

士郎さんは結局、最後まで自然な笑顔で付き合ってくれた。いやー、来てよかったわ。絶対また行く。そんでじっちゃんにコーヒー奢ってもらおう。

その１０（前書き）

繋ぎは当然短い。

その１０

しばらく経って日曜日、今日は主人公が木の化けモンとバトる回やね。やから家に引きこもってたんやけどなー……

「おつかいとか運わりーなー……」

これゼッテー巻き込まれるフラグやわー、うわーサイアクやわー。

そして帰り道。

「……ほら見ろ巻き込まれたー、ふざけんなマジで」

案の定巻き込まれた。幸い震源（？）からは離れた場所やから良かったけど、これがもっと近くやったらどーなってたことやら。

「取り敢えず逃げる、マジサイアクやわ」

いかん、口調が前世のになっとる。まーそんだけ思考がダウナーになってるってことなんやけどねー。

「はぁ……はぁ……」

必死に逃げてたら急に静かになった。そんでしばらくして、震源（？）があった場所に煙が昇り始めた。やっと終わったかー……クッソ疲れた、今までで一番疲れた。

「結界張るのおっそ……転生者連中何やってたんだよ……」

……まーうだうだ言っててもしゃーないかー。

「……かえろ」

帰る途中に口調直しとかんとなー……

その１１（前書き）

ストーリーの関係上仕方ないとはいえ、これはテンプレと言われても仕方が無い。それと時間の都合でこれからは１日１話しか上げれなくなりました、ご了承ください。

その11

あれからまたしばらく経った週末。たしか今日はＶＳ金髪ツインとの初戦やった筈。この前みたいに巻き込まれたくないし、読んでみたい本の値段高かったから図書館にでも行ってみるかー。

ーーーとか思ってた数時間前の俺へ。

「なぁ、どんな本読んどるん？」

取り敢えず今の俺に謝りに来い、許さんけど一発ぶん殴るわ。

図書館は大抵子供向けコーナーと大人向け（専門書）コーナーに分かれてるんやけど、俺が読みたかった本は大人向けコーナーにあった訳で。微笑ましい目で見てくる史書さんに言って探してもらってやっと読み始めた訳だ。

「なぁ、どんな本読んどるん？」

そしたらこれだ。まさか原作キャラ（子狸）に絡まれるとは思わんかった……とは言えん。よく二次創作でもあるやんこんなシチュ。それを忘れてた俺の馬鹿、アホ、マルキュー。

「……読む？」

本を渡してみて考える時間を稼ぐ。さてどーする？このまま絡んだら2期で巻き込まれる可能性がめっちゃ高い、てかほぼ確実に巻き

込まれる。てかそもそもこの状況を転生者連中はどう見る？俺を知ってるヤツならまだしも、そうじゃねーヤツとかがこれ見たらヤバくね？一応子狸から話しかけてきた状況やけど、それすらお構い無しに攻撃してくる連中もいるし、１番の連中とか。

「ダウジングかー……君、こんな難しそうなんよぅ読めるなー」

「将来のためだし、好きなことだから難しくても頑張れる」

……フツーに対応してしまった。いや、仕方なくね？あっちはなーんも知らんのに、こっちの都合で変に対応したらかわいそうやない？やからしゃーない。頼むから絡むなよ転生者連中。

「将来のため？トレジャーハンターとかか？」

「いや、探偵だよ」

「探偵？」

「そう、ダウザー探偵……んじゃ、俺はこれで、じゃあね」

取り敢えず早く帰りたい。家でゆっくりしたい。これ以上俺の平穏を原作や転生者連中に邪魔されたくない。けど子狸を傷付けるのもなるだけ避けたい。結論、このまま帰る。

「あ！……行ってもうた、変なの」

ビミョーに聞こえてた。できればそのまま俺のことは忘れてくれ、いやホント。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3747z/

変わった転生者、なんかな？

2011年12月18日00時52分発行